

学びを選ぶ学びをつくる

シユタイナー学校の1年

1年生から100分間、エポック授業とは？ 起承転結の4部構成

第3回

「2年生の子どもの集中力が持つ時間は、30分程度が限界です」——。こう語るのは、横浜シユタイナー学園2年生担任の森田修先生(46)だ。でも、ちょっと待ってほしい。公立学校の授業のように1時間45分ずつで学習内容が変わるのではなく、毎朝、2時限合わせた100分間、同じ教科を3〜4週間にわたり集中的にじっくり学ぶのがシユタイナー教育の「エポック授業」ではなかったのか。2年生の授業を見学させてもらった。

静から動、動から静へ

5月15日午前8時半、2年生の「数(掛け算九九)」のエポック授業はこんな具合に始まった。

机と椅子は教室の隅に寄せられている。森田先生と12人の子どもたちが小さな輪をつくる。輪の中心には椅子に置いたろうそくと小さな鉄琴。先生がマツチで火を付け、ささやくように語り始める。20人も入ればいっぱいの狭い教室だが、見学した後ろの席では声が届きにくい。

教室から私語が消えた。森田先生は子どもたち一人ひとりの名前をメロディーに乗せて呼びながら、朝のあいさつをしていく。先生に呼び掛けら

れた子は背筋が伸び、森田先生の目を真つすぐ見返し、先生と同様に歌であいさつを返す。途中、窓を開け、この日休んだ子にも届くように全員で「おはようございます」と歌った。

そして、全員で詩を2編朗誦した後は、1年生の終わりに森田先生が子どもたち一人ひとりに向けてつくった詩を、この日、火曜日に生まれた2人が順番に唱えた。ろうそくの火を中心に、全てが静かに進む。

ろうそくの火を消してリズムの時間に入ると、今度は一転、活動的になった。子どもたちは2人ずつの組になった。森田先生が「なーんの字」と歌いながら宙に書いた漢字を1人が見て、それを組になった友達の中に指で書く。字を書かれた子が何と書かれたかを当てるゲームだ。この日の漢字は「左」「右」「石」「青」。1年生の3学期に森田先生がつくった物語を通して、「その犬の右と左には青い石がありました」というフレーズから習った漢字で、ゲームは漢字を定着させるためだ。

ようやく算数らしきものが始まったのは、約20分が経過してから。厚紙で作ったサイコロが二つ。子どもたちがそれらを投げ、出た目の合計になる

ように計算式をつくっていく。掛け算の場合は、合計が6なら「6は1×6」「6は2×3」「6は3×2」「6は6×1」という具合だ。このコーナーでは掛け算だけでなく、四則演算全ての練習が行われた。

国の学習指導要領では、割り算は小学3年生からだだが、このクラスの子どもたちは1年生の3学期に既に全ての四則演算を簡単に学んでいる。「全体を捉え、そこから部分に入るシユタイナー教育の特徴的な点です」と森田先生。四則演算全てを初めに示すことで、数の世界の全体像に早い時期から触れさせるといふ。

ここまで時間にして約30分。全てが5分、10分間隔で進んでいる。

子どもたちがやつと取り出したエポックノートと呼ばれる、大判のスケッチブックには「もじ3」と書かれている。また、漢字の学習に戻ったようだ。きょう新しく習う漢字は「音」。漢字の成り立ちに基づき、森田先生がつくった物語をベースに、黒板に口と剣の絵が描かれた。それが昔の漢字になり、「音」に変わっていく。子どもたちは物語に呼応してノートにクレヨンで描いていく。出来上がった漢字は1画1画色を変えていく。1画面から書き順に従って赤、オレンジ、黄、緑、青……と、虹の配列の順だ。カラフルな教科書兼ノート」の1ページが出来上がった。

この漢字の学習には約30分が使われた。森田先生の言う「限界」だ。落ち着きをなくす子が出始めた。しかし、森田先生が声を荒らげたり、大き

くしたりすることはない。静かに語り掛け続ける。シユタイナー教育では「教師は、反感とともに共感からも離れたところから、畏敬の念を持つて子どもたちに接する」ことが求められているからだ。トイレ休憩を挟み、子どもたちが落ち着きを取り戻したところで、いよいよこの日メーンの掛算九九。前日までに学んだ「4の段」の続きだ。子どもたちは机を黒板に向かって半円形に並べて席に着いた。このコーナーでもまずは体を動かすことから始まる。

声を出して数えながら肘や膝をたたき、4の倍数のときに強く打つといった踊りのような導入だ。森田先生によると、シユタイナー教育では「数は内面のリズム」と考えられており、前述のサイコロを使った九九と同様、これも「体で数を感じる体験する」試みだ。公立学校で多く行われているように、2の段の次は5の段のように、切りがよく覚えやすいものから始めることはしない。体の動きが簡単な数、すなわち1から2、3、4……と順番に学ぶ。

観音開きの黒板を大きく広げると、前日までの授業で描かれた4頭の馬とその上に1〜12までの数字が、そのまま残っていた。教師によつて異なるが、数の導入の際に、1はお日さま、2は両手、3は三つ葉のクローバー、4は馬の足……などと、それぞれの数の本質を象徴するようなイメージとともに教えられる。

ここでも物語が登場する。4の段では、天使が12人の小人を訪れ、「速くに住む困った人たちを



エポック授業は学びを体験(15日午前)

助けてあげなさい。遠くに行くために1人に1頭ずつ馬をあげよう」と諭す物語を、森田先生はつくった。3人の小人なら、馬の足の数は12本になる、というように学ぶ。さらに、太鼓が登場。森田先生が「どどんがどん」のリズムで太鼓を鳴らし、「やりたい」と手を挙げた数人に4の段の九九を唱えさせた。

ここで九九の学習は終わり。森田先生は再びうそくをともし、イソップ寓話「カラスと鳥の王

様」の語り聞かせを始めた。神様から「最も美しい鳥が王様になれる」と言われ、カラスが他の鳥の美しい羽を集めて身に着けるが、最後は他の鳥たちから全てを暴かれるというものだ。シユタイナー教育では、2年生のこの時期、現実と想像の世界にだんだん区別がつくようになると思われる。ずるさや欠点を持った動物が多く登場する寓話を通して、自分や友人の中にある身勝手さや課題をより深く理解できるようにする狙いだ。

寓話を話す際に、森田先生の手にはイソップの本はない。寓話は毎日変わる。森田先生は授業中、教案を見ることがなかった。「教師が教案を見れば、子どもたちは、学ぶ価値がある、自分のものにする価値があるものとは感じられないからです。でも、教師にとつては大変です」と森田先生。

学びを“体験”

塾や予備校には名物教師と呼ばれ、パフォーマンスで子どもたちを引き付ける先生がいる。もちろん、公教育でも子どもたちの興味を引き付け、飽きさせない授業展開をできる実力を持つ教師は少なくない。森田先生の場合は、脱サラして4年前に教師になつたばかり。それまで、電機メーカーの海外部門に身を置いていた。教師経験は長くない。

にもかかわらず、100分間の授業中、子どもたちがざわついたり、集中力を欠いたりしたのは、前述の漢字の学習の時の一幕だけ。子どもたちは森田先生の授業の流れに巻き込まれ、100分間

が過ぎた。見学して飽きることはなかった。が、疲れもした。100分間、何が子どもたちを引き付けていたのか。

森田先生は「見ていただけた一方通行の100分間は大人でも続きません。教師同士で授業を見学し合っているだけでも疲れますよ」と笑った上で、こう続けた。

「先輩教師から色に例えて教わった。敵かな緑から始まり、輪になって動くときは明るく弾む金色。ここまですがウォーミングアップです。それから学びに集中する青、また、静かになるためのお話の時間は薄いピンク。起承転結の4工程になっているからこそ、特に、低学年の子どもたちでも100分間集中できる。それに、子どもたちは声を出し、体を動かして学びを「体験」する。全体の授業構成と体験する授業形態が肝です」

確かに45分の授業で、この4工程を作り出すのは難しい。では、2時限を1こまとして、授業のメソッドとして採り入れれば、他の学校でもまねできるものなのか。

これについて、森田先生は「シュタイナー学校では、特に低学年の時期、遊びの真剣さと熱中を持って学びに入る。必ず手から入り、感情、思考に至る順番も変わらない。こうした思想があつてのエポック授業。形は同じようなものになつても、日々新たに作り直していくことは難しい。シュタイナー教育が目指すものとは違うものになるのではないのでしょうか」。

シュタイナー教育は、生まれてから7年ごとに、

0〜7歳までを第1・7年期、7〜14歳を第2・7年期と区切っており、8年生(中学2年生)までがこの第2・7年期に当たる。この時期は、感情を豊かに育む時期とされ、抽象的・論理的思考を養うのはこの後の第3・7年期(14〜21歳)とされる。年齢によつて、意思、感情、思考に働き掛けていくことによつて、子どもたちは物事を深いところで体験し、創造的に行動する人間へと成長していくと考えられている。

忘れてもいい

「ひとつの学びを終わりました／学んだことを休ませましょう／わたしのなかで芽を出して／知恵と愛と力に育つよう／私が人々と大地のために／福をなすものとなれるよう」。授業の終わりに、子どもたちは再び輪になり、こんな詩を唱えた。

3〜4週間集中して同じ教科を学んだ後、今度はまた別の教科に取り組むのが、エポック授業のもう一つの特徴だ。その間、今、学習している教科は学ばない。森田先生のクラスも5月いっぱいまで掛け算九九は終わり。次に九九を学ぶのは2学期になつてからだという。しばらく間を置いた後、再び授業で取り上げること、休んでいる期間に子どもの内面で消化され、深く受け止められると考えられているからだ。

ただ、欧州生まれの教育方法を日本で実践する以上、制約もあるという。文字がアルファベットだけの欧州の言語とは異なり、例えば、数が多い漢字を定着させるには、日々、漢字に触れている

ことが必要だ。指導要領が習得を求める配当漢字の数から大きく遅れないようにという配慮も働く。森田先生は「本来であれば、もつとシンプルに、数の学びに入るという流れを大切にしたい。しかし、漢字の学習もせざるを得ない。どう折り合いをつけるか。ある意味、妥協でもあります」と話し、九九についてもこの日のリズムの時間同様、繰り返していく考えだ。

「私も受験勉強のときは、ノートを写真のように頭に焼き付け、ノートのあるところに書いてあつた、と思い出した口です」と笑う森田先生だが、「シュタイナー教育の忘れると、受験で勉強した知識を忘れるのとは違います」と強調する。

クラスの子とその保護者が、学籍を置いてある小学校の校長と面談した時のことだ。校長室の壁には、象形文字のような古い時代の漢字が書かれた中国の書が飾られていた。無口で静かな子が「これは川、これは山」と、うれしそうに話し始めた。校長は「どんな学びをしているのか」と驚嘆したという。

単なるパフォーマンスで子どもたちを楽しませるだけではなく、どこまで学習内容を身につけさせるか。森田先生は語る。

「機械的に覚え込んだのではなく、体、感情を通して入つたものは、単なる知識ではなく、将来豊かな思考力や行動力に育つべく、その種となり子どもの中に残るのではないのでしょうか」

(田橋秀之「内外教育編集部」)